学習院大学新聞

発行所
学習院大学新聞社
〒171-8588東京都豊島区
目白1丁目5番1号
電話 03（3986）0221内線2607
http://www-cc.gakushuin.ac.jp/~press/
press@gakushuin.ac.jp
発行・編集人　佐藤貴裕
年間500円

学生の提言 優秀作が集まる

喫煙のあり方を多角的に論じる

（後方左から）志村知晃さん、岩田正文さん、森元邦寛さん
（前方左から）永田良昭学長、遠藤久夫学生部長

平成18年度の「学生の提言」の結果が学生部より発表された。テーマは「大学生と喫煙」。これは、たばこの害が社会的に問題となる中での学生の意識を問うたものだ。表彰式は昨年の11月21日に行われ、優秀賞の岩田正文さん（自然科学研究科物理学専攻博士前期課程2）を含む計3名に賞状と副賞が授与された。

近年、喫煙に対しての非難が高まっている。路上喫煙禁止条例を施行する自治体もあり、企業においては分煙化が進む。また、教育機関でも敷地内全面禁煙が実施されているところも見られる。このように、至る所でたばこによる健康被害の対策が講じられているのだ。しかし、世論の高まりに反して、学内では歩行喫煙、吸殻の投げ捨てなどの問題が散見される状態である。そこで、喫煙の是非やモラル、嫌煙権といった様々な角度からの論文が募集された。だが、学生の反応は芳しくなく、応募総数は6件に留まり、主催者の予想を大幅に下回る結果となった。

各論文の審査は、永田良昭学長をはじめとする8名により厳正に行われた。選考の対象となった作品は、喫煙の有害性、禁煙ブームなど、同内容のテーマ設定が目立つ。だが、その中でも学生たちは各々に独自の切り口を展開させていた。

最終的に優秀賞の栄光を勝ち取ったのは、岩田正文さんの作品である。彼の論文では、本学の分煙規制に関して政策提言がなされている。さらに、学内の地図で灰皿の設置場所を示すなど、具体性を強くアピールした。この点が高く評価され、今回の受賞に至ったという。やはり、喫煙という現実的な命題のため、実現可能な考察が選考の決め手となったようだ。

佳作受賞者は、森元邦寛さん（営3）と志村知晃さん（済3）。彼らの作品は、それぞれが喫煙者と非喫煙者の立場となってディベートをするといった内容の合作であった。これは読者が感情移入しやすい構成であるが、審査員に議論の詰めの甘さを指摘されてしまう。表層的な内容が審査に尾を引いてしまったが、ユニークさを全面に押し出した点が好評であった。また、惜しくも参加賞に終わった4作品も逸品揃いで、これらを高く評価する審査員もいた。しかし、総合的に判断すると、残念ながら優秀賞や佳作には及ばなかったのである。

今回の結果を受けて、遠藤久夫学生部長は「これを機会に多くの学生が喫煙の是非やマナーについて考えてくれれば幸いです」と語った。今年度の論文は、学生が喫煙への成熟した意見を抱く絶好の機会となったようである。

役員改選行われる
常任委員会

運動部常任委員会、文化部常任委員会、文化系同好会常任委員会が、それぞれ平成19年度の役員を改選した。各役員選挙が執り行われたのは、昨年12月1日である。なお、新たに選出された役員の氏名は左記の通り。

運動部常任委員会

委員長兼情報宣伝局長　上原巧也（法3・剣道部）▼副委員長兼学内大会実行委員長　坂本太樹（政3・アイスケート部ホッケー部門）▼副委員長兼四大戦推進局長　佐藤日奈子（仏3・準硬式野球部）▼運営局長兼甲南戦推進局長　田邊晋（営3・アメリカンフットボール部）▼運営副局長兼書記局長　長友健太朗（政3・ラクロス部男子）▼会計局長　小山智久（済2・フェンシング部）▼渉外局長兼学内大会副実行委員長　星崎友里（英3・ホッケー部女子）▼保険局長　木平麻美（仏3・ヨット部）▼編集局長　長野萌（営3・硬式庭球部）▼情報宣伝副局長　小澤翼（政3・射撃部）▼四大戦推進副局長　仲野貴洋（営3・航空部）

文化部常任委員会

委員長　三浦昇悟（法2・映画研究部）▼副委員長　河原彩子（法2・経済学研究部）▼会計　三冨大樹（法1・将棋部）▼渉外　土屋朋子（政1・生物部）▼広報　津田明日香（政1・観光事業研究部）▼企画　小澤友梨（済2・美術部）

文化系同好会常任委員会

委員長　源田修一（法2・地学研究会）▼副委員長　門野広大（法2・シェイクスピアドラマソサエティ）▼企画委員　小野瑠依（独1・探検クラブ）▼会計委員　渡邉圭司（政1・コンピューター研究会）▼渉外委員　木村友香（営1・漫画研究会）▼書記委員　三輪夏子（心1・民族舞踊研究会）

激動の満州に思いを馳せる

昨年の11月30日、西2号館501教室にて「満蒙開拓青少年義勇軍」と題した講演が行われた。講師のロナルド＝スレスキー氏は、ハーバード大学にて東アジア研究を専門としている。彼の長年の研究テーマである満州での開拓生活の模様が、当時の少年たちの目線から語られた。そこには、理想と現実の差に悩みながらも激動の時代を懸命に生き抜いた若者たちがいた。（毅）

学習院 研究最前線 学問研究の「いま」

今回は哲学科の有川治男教授です。専攻は美術史で、現在は後期印象派画家として名高いゴッホの研究をなさっています。その中でも、美術鑑賞の方法について、お話を伺いました。

（取材・構成　阿部遥）

◇　◇　◇

「西洋絵画の解釈の奥行き」
文学部哲学科　有川治男教授

絵画を観る眼の解放

研究に至るターニングポイント

現在の研究テーマであるゴッホ。先生が最初にゴッホに強い興味を抱いたのは中学生の頃である。ある近代絵画の本を開き、それが後に影響したのだ。「大学院のゼミレポートのテーマを考えた時、中学時代に見たその本のことを思い出しました。ゴッホの生きた19世紀の社会の中での生活模様が好きで、それに関心があったことも研究を始めたきっかけの一つです」

ゴッホに対する先生の取り組み

絵画を解釈する際には、描かれた事物と画家の状況とを照らし合わせ、そこに画家がなぜそれを描いたのかを推測することが不可欠であると先生は語る。例えば、ゴッホを考える上では19世紀の社会を考える必要がある。当時ゴッホは南フランスのアルルに1年ほど滞在したが、そこでの生活は創作活動に大きな影響を及ぼしたという。

「19世紀のアルルは、住民、あるいはパリの人々にとってどのような地域であったのか。アルルへの旅行が、ゴッホにとってどのようなものであったのか。その状況を、当時の様々な印刷物を元に考えてみることで、彼の視点に近づけます。それにより私たちは、ゴッホがアルルで描いた作品を、ただの絵としてではなく、その時代の一つの情景として捉えることが可能になるのです」

このように絵の観者は、絵画という表現媒体から時代を俯瞰することができる。さらに先生は、ゴッホ自身の人柄や絵を描いた心情も丹念にすくい上げ、研究の資料にしていく。

「アルルで絵を描いた頃のゴッホの精神状態は、彼が友人や家族に宛てた手紙や、読んでいた本などから推察することができます。そして、そうした予備知識を統合して絵画を鑑賞すると、アルルでの生活が彼に与えた影響がどのようなものであったのかが次第に鮮明になってくるのです」

絵をただ美しいものとして観るだけではなく、背景となるあらゆることを関連づけ、そこに親しみを見出していく。それが鑑賞の面白さなのだ。また先生によると、絵画を「解釈する」ということは、最終的には観者である私たちに委ねられているという。

「ある絵画を解釈する時、その絵が高名になればなる程、すでに研究がし尽くされ、新しい解釈はないと思われがちです。とりわけゴッホのような有名な画家の作品となると、その絵画の解釈の仕方は、ある程度決まっているかのように大抵の人は思ってしまうんですね。しかし、言葉の受け取り方が人それぞれ異なるように、絵に抱く印象も千差万別なのです。実のところ、有名な絵画であればある程、解釈の奥行きは深く、その種類は多様だと言えるんですね。つまり、新しい解釈の可能性はまだ存在するというわけです。ですから、絵の美しさを知り、ゴッホ自身を分析した後、自分の感性に素直になり、もう一度その絵を解釈していく。そこには、その人にしかない、絵の捉え方が生まれてくるはずです。こうした一連の過程が、絵画を解釈するということだと思います」

目前に広がる青写真

今なお多くの人を魅了してやまない絵画。その美の追求には、広い視野と局所的な考察が必要となる。先生の研究の果てには、一体どのような展望が広がっているのだろうか。

「これまでは主に美術作品自体の研究を進めてきました。しかしこれからは、19世紀の旅行案内書など、当時の人々の価値観が身近に感じられる資料に、より重点を置いて調べようと思います。そして、そこから得たものを、絵画の解釈へと反映させていく。そのような研究を展開していきたいです」

画家個人の生活と、絵に付随する時代背景。その切り口次第で絵画の鑑賞の幅は無限に広がる。見る者を自由な方向へいざなう先生の研究に、今後の期待は高まるばかりだ。

19世紀に発行された出版物

PROFILE

有川治男（ありかわ・はるお）

1979年東京大学大学院美術史専攻修了。76年から78年までミュンヘン大学に留学。79年より国立西洋美術館に勤務した後、92年より現職。

平成18年度 国家試験の結果

平成18年度の国家試験における本学学生、及び卒業生の合格者数が就職部より発表された。なお、卒業生には、本学大学院の学生も含む。以下に示す数字は、昨年11月30日現在の集計に基づいたものである。

国家Ⅰ種試験には卒業生1人を含む2名が、Ⅱ種には卒業生13名を含む25名が合格した。初の実施となった新司法試験では、法科大学院から15名が合格。そして、旧司法試験からは在学・卒業は不明だが、5名がこの関門を突破した。

今年度の国家Ⅰ種、Ⅱ種試験の合格率は例年並みの結果となった。しかし、合格者数は昨年度に比べて半減したという。このことについて就職部は、受験者の減少が合格者の低下につながったとの見解を示した。景気の回復や2007年問題に伴い、民間企業は採用人数を大幅に拡大。この現象に比例して、公務員から民間へと進路変更する学生が多くいたようだ。そのため受験者数が減った模様である。

就職部では本学の合格率上昇を図るため、来年度より「公務員セミナー」の内容を一新。公務員志望の学生のニーズに応えるよう、より中身を充実させたものにした。さらにこれから国家試験を目指す学生に対して、「国家試験を制するには、合格しようという強い意志を持ち、早期から対策を進めることが大切です。今年の4月12日には、公務員志望者向けのガイダンスを行う予定ですので、積極的に参加してください」と呼びかけた。

素朴な疑問
日程表の公式は？

12月のある日、授業を終えた私は、西1の掲示板前に黒山のような人だかりを発見！　何か重要な掲示でもあるのでしょうか。おやおや、学年末試験の日程表でした。危うく見逃すところでしたね。

でも、この試験日程ってどうやって決められているのだろう？　もし事前に日程が予測できれば、早くから能率よく勉強できるのに。今さらとは思ったけれど、今後のテストに活かせればいいなぁ。ということで、真相を突き止めるべく教務課へ向かいました。

窓口で突然こんな質問をする私に職員の方は一瞬驚いたものの、「見ればすぐわかると思いますが、1週目は非常勤の先生が担当なさっている授業のテストを比較的多く充てています。そして結果的に専任の先生は、2週目に多く割り当たってしまうんですよ」と教えて下さいました。それに加えて、教室に収容できる人数を考慮して日程の微調整を行うようです。組み合わせにも一苦労ですね。

帰り道の電車の中で、書き留めた試験日程を再び見てみました。確かに法則通りです。それにしても、私ちょっと間が抜けていました。これまでずっとこのことを知らなかったなんて……。（飛）

情報特急便

本年度の退職教授

平成19年3月31日をもって本学を退職される教授は次の通り。

政治学科　森永毅彦教授
政治学科　砂田一郎教授
日本語日本文学科　十川信介教授
心理学科　篠田彰教授
数学科　片瀬潔教授
法務研究科（法科大学院）　高木光教授
法務研究科（法科大学院）　沖野眞已教授
法務研究科（法科大学院）　多比羅誠教授

平成19年度定期健康診断実施日程

日時・4月2日（月）
女子　4年生　大学院生
専門職大学院生
4月3日（火）
男子　4年生　大学院生
専門職大学院生
4月4日（水）
女子　2・3年生
4月5日（木）
男子　2・3年生
4月6日（金）　女子　1年生
4月7日（土）　男子　1年生
受付・午前　9時〜11時30分
午後　1時〜3時30分
4月5日のみ午後3時まで
場所・西5号館B1教室にて集合

平成19年度定期健康診断学生補助員（アルバイト）募集

日時・4月1日〜7日
内容・学生健康診断補助
備考・要申込

明窓浄机

昨年、二十歳になった。自宅には年金の請求資料。幼い頃から「大人」という像に憧れ続けてきた私は、この事実を喜びをもって迎えるはずだった。だが、いざ自分が成人になってみると、その称号に酷く恐縮してしまった。思っていた大人の姿と、実際の自分の姿とがあまりにも一致していない。親のすねをかじり続ける自分が成人となる。それが、実に不遜なことであるかのように思えてしまったのだ▼私は、時の流れに身を任せておけば、みな勝手に大人になれると思っていた。そして、大人とは全てが自由なのだと都合よく考えていた。しかし現実は、自由な分だけ課される義務も責任も重い身である。そしてそのような状態の中、人は自力で大人にならなければならないのだろう▼大人とは自身を知っている人のことだと思う。自分の忍耐力はどこまで続くのか。どこまでが自分の能力なのか。そして、本分をわきまえて、今できることを考えてみる。冷静に過不足なく現状を測ると、自然と客観的な己の姿が見えてきた。それは、世の中に甘えて何もかもを軽視していた愚かな子供だった。その温湯に浸った状態から自力で這い上がることが、今は一番必要なのかもしれない。つまり自分に対して厳しい姿勢でいる。それが、私の子供時代への落とし前であろう。（熊）

2 内定獲得のコツ

この先数ヶ月で、就職活動はいよいよ本格的な局面を迎える。就活中の学生はもちろん、下級生も今から関心を払っておきたい。

紙面紹介

3 夜の乙な過ごし方 星の特集

4 最終戦を競り勝つ アメフト部

Viva 北海道！

網走・博物館網走監獄

北海道の魅力満載でお届けした本コラムも今回でラスト。道内の素晴らしさが少しでも伝わりましたか？　写真は博物館で食べられる監獄食です。今春、是非一度ご賞味あれ。（幌）

社告

新聞づくりは文章上達の近道。膨大な情報のなかから不要なものをいかに落とし、必要なものをいかにまとめていくかがポイント。企画を練り、取材を行い、記事を書き、見出しをひねり出すことで、自然と情報を編集する力がついてくる。その力は講義でも演習でも役に立つこと請け合い。興味がある方はぜひ黎明会館316号室へ。

社員、募集。

（実は密かに「急募！」だったり）

学習院大学新聞社
黎明会館316号室　3986-0221（内線2607）
http://www-cc.gakushuin.ac.jp/~press

夢を掴み取るために

就職試験対策特集

就職活動に定石はない。だからこそ、ノウハウを多く身につけておくことが肝要だ。本特集を読んで、就活本番に向けた対策へ取りかかろう。

今年は団塊の世代が大量に定年退職を迎える、いわゆる「２００７年問題」の年である。それゆえ、企業は新規採用の動きを特に活発化させ、学生側の売り手市場はさらに加速すると言われている。これまでの就職氷河期と比べ、学生には多くのチャンスがあると言って良いだろう。

　だが、決して油断は出来ない。大手人気企業には例年よりも多くの志願者が集まり、内定獲得は困難な状況となっている。また、どこからも内定を得ることが出来ない学生も少なからずいるのが現実だ。採用の動きが年々早期化していく中で、うかうかしているとライバルたちから決定的な遅れを取ってしまいかねない。まずは自己分析や企業研究を重ね、自分がどんな仕事をしたいのかをしっかりと見極めることが大切だ。その上で、エントリーシートや筆記試験、面接試験の対策をそれぞれ万全にしていかなければならない。

　大学生活は4年間だが、会社に入ってから定年退職するまではおよそ40年間もある。入社後すぐに辞めてしまう新卒者の増加が問題になっているが、そうならないためにも、満足のいく就職をしたいところだ。勝敗のカギを握るこれからの数ヶ月は、気を抜く暇もない長期戦となる。様々な関門を突破し、見事内定を勝ち取ろう。

エントリーシート作成のポイント

多くの企業では、まずエントリーシートによってふるいわけを行う。これは書類選考の材料となると同時に、面接時の参考資料にもなるので、極めて大切になってくる。だからこそ、エントリーシートでの失敗は絶対に許されないのだ。

　エントリーシートにおいて最も重視されていることは、当然書かれている内容である。しかし、単純に書き連ねるだけでは厳しい争いを勝ち抜けない。そのために、まず考えるべきことは、採用担当者の立場に立つことだ。採用担当者は幾多ものエントリーシートを読まなければならない。よって、一枚一枚じっくりと読む暇はないのである。そんな彼らにアピールするためにも、読みやすい文章を心がけたいところだ。具体的な例としては、改行や余白を利用しスッキリと見せる方法がある。他には、目立たせたい文字を大きくすることも効果的だ。ただし、その場合は全体のバランスを考えなければならない。下手に多用しすぎても逆効果になってしまう。こういった工夫をすることで、書かれている内容も一層輝きを放つこととなる。

　だが、強くアピールしたいからといって、一つの項目に多くの話題を盛り込んで話を複雑にしてしまうと、焦点がぼやけてしまう。それならばポイントを一つに絞り、内容をさらに具体的に記述した方が、採用担当者には理解されやすいだろう。また、いざエントリーシートを書くとなった際、どうしても作文のように書いてしまう学生は実は少なくない。しかしエントリーシートでは、何も起承転結をつけて書く必要はないのだ。むしろ結論を先に持ってくれば、何を伝えたいかが始めに目に入るため、強く印象づけることができる。これらのことを意識するだけでも、エントリーシートが見違えるほど読みやすくなるだろう。

　さらに、企業によっては、解決策の提案を求める問いが出題されることもある。こういった設問では差がつきやすいのだ。そこで気をつけなければならないことは、問題提起だけで終えるのではなく、たとえ間違っていても自分の仮説を立てるということである。設問の意図は解決策の提案にあるので、それを無視することは採用担当者に悪い印象を与える原因となりかねない。そして、答えの表現がネガティブになっていてもいけない。あくまでも自分の仮説を分かりやすく、前向きに書くことを心がけよう。

　文字で自分の考えを表現することは難しい。何百社分ものエントリーシートを書くとなればなおさらだ。次の段階へ進むためにも、十分にアイデアを練り、自分の魅力が最大限に伝わるエントリーシートを書き上げよう。

（増井亮太）

就活生の活動報告

この時期、学生たちはどのように就職活動を進めているのだろうか。就活真っただ中の3年生に、これまでの活動状況について語ってもらった。

——皆さんは、現在どんな活動をしていますか?

A君「僕は毎日の様にセミナーへ通っているよ。とりあえず、色んな会社の話を聞いてみるのが大事だと思ってね」

Bさん「私も就活関係のイベントにはたくさん出席するようにしているんだ。でも最近、そこまで出てもしょうがないかなって思えてきた。このままじゃ体力も続かない気がするんだよね」

C君「僕もそう思う。だからもっと、志望している業界に絞って参加するようにした方がいいかもね」

——では、その他に行っていることとしては何が挙げられますか?

A君「筆記試験対策やOB訪問かな。でも、筆記試験対策も対策本を買って少し勉強したぐらいだし、OBにもまだあんまり会ってないんだよね。ツテが見当たらなくてさ」

Bさん「それだったら就職部の資料を使って探せばいいんじゃない? 就職部の人は親切に対応してくれるし、役立つ資料が多いからもっと利用した方がいいと思うよ」

C君「OB訪問は、自己分析や企業研究という意味でも効果があるかもね。僕が申し込んだ企業も、早いところでは面接試験が始まっているし、もうゆっくりはしていられないよ」

Bさん「それで、面接試験を受けてみてどうだった?」

C君「正直言って、相当緊張したね。試験時間は5分ぐらいだったけど、途中で言葉に詰まって頭の中が真っ白になっちゃったよ」

A君「やっぱり本番までには対策を万全にして、余裕を持って臨まないとね」

　セミナーには多く参加していても、それ以上の活動はうまくこなせていないのが現状のようだ。だが、この先の残された期間が内定を得られるかを左右する。後悔のないよう、充実した日々を送ってもらいたい。（今村隆介）

筆記試験 傾向と対策

筆記試験は、企業が学生の能力を客観的に判断するための手段である。採用試験において大きな役割を持つこの筆記試験に関して整理してみよう。

　まずはじめは、大半の企業が実施する知識検査についてだ。この試験では主に一般常識や時事問題が出題される。対策として、新聞やニュース番組を毎日見る習慣をつけ、社会の動きに注意すると良いだろう。また、一部の企業では業界知識が問われることもある。企業のホームページだけでなく、会社四季報や業界専門誌などにも目を通しておかなければならない。

　知識検査の他にも、筆記試験では学生を総合的に評価するための適性検査が課せられる。その適性検査の主流と言えるものがＳＰＩ2だ。この試験は、性格適性検査と能力適性検査という2種類の検査で成り立っている。

　性格適性検査とは、学生の性格がその企業や職種に向いているかどうかを判断するもの。そして能力適性検査とは、基本的な学力を試すものだ。この能力適性検査は言語分野と非言語分野に分かれている。言語分野では主に基礎的な国語の能力、そして非言語分野では主に算数について問われるのだ。出題パターンを覚え、正確に解答できるようにしておこう。

　さらに、ここ数年ＳＰＩ2とは異なる試験を導入する企業が増加している。その代表的なものがＣＡＢとＧＡＢだ。ＣＡＢはＩＴ業界などのコンピューター専門職の採用試験で使用される。内容は、暗算や法則性、命令表、暗号読解という特徴的なものだ。一方、商社や証券業界で多く実施されるのがＧＡＢである。ＧＡＢは、長文読解を問う言語分野と、図表計算を出題する計数分野で構成されている。このＣＡＢとＧＡＢで共通して求められるのは、大量の問題を短時間でこなすこと。つまり、企業は試験を通して学生の事務処理能力を試しているのだ。なお、どちらの試験もＯＰＱという性格適性検査と併用される。ＳＰＩ2よりも設問が複雑なため、問題に慣れておくと安心だ。

　また、企業によっては、ＥＮＧなどの試験で英語の能力を測定するケースも増えている。希望する企業の試験がどのような形態なのかを調べることが、筆記試験対策の第一歩だろう。

　このように筆記試験では学力のみならず、社会人として必要な教養や、職業への適性が問われる。本番で確実に得点するために、計画的に試験勉強を進めることが大切だ。

（賀来潤恵）

テスト名	問題	問題数	時間
SPI2	能力適性	—	70分
	性格適性	—	40分
ENG	英語	40問	30分
CAB	暗算	50問	10分
	法則性	40問	15分
	命令表	50問	20分
	暗号読解	39問	20分
GAB	計数	40問	35分
	言語	52問	25分
OPQ	性格適性	68問	30分

就職部に聞く面接の極意

内定を手に入れる上での最後の関門となる面接試験。その重要な局面をどのように乗り切れば良いのか、就職部就職課の瀬谷晴仁課長にお話を伺った。

　はじめに、現在の企業が求める人材について尋ねた。「共通して求められているのは、コミュニケーション能力と自立心がある人です」。つまり、相手が必要としていることをよく理解した上で自分の考えを伝え、さらに自発的に行動できる人材を企業は望むのだ。

　それでは、企業が面接試験で評価するポイントは主にどのようなものなのだろうか。「大切なのは、論理的な思考力です」と瀬谷課長は語る。論理的思考力とは、例えば、質問に対して面接官が求める情報を的確に回答できる力。そして、自己ＰＲを制限時間内で分かりやすく伝えられる力などである。そういった思考力を身につけるためには、友人などに自己ＰＲを聞いてもらい、きちんと伝わったかどうかを確認する練習が特に効果的だそうだ。

面接について熱く語る瀬谷課長

　また、面接においては元気の良さや爽やかさといった第一印象が重視されるという。限られた時間内で、面接官に好印象を与えるためには、的確な回答だけでなく、視覚的なアピールも重要なのだ。「第一印象を決める大きな要素は、元気なノックとあいさつ、そして笑顔です」。日頃から自分の「最高の笑顔」を作る練習をすると良いだろう。

　ところで、面接試験における注意点にはどのようなものがあるのか。まずは、企業側と学生側との間にある認識のズレについてだ。例えば、アルバイトやサークル活動についての質問をされると、多くの学生は活動してきた内容の説明に終始してしまう。しかし、それが大きな間違いなのだという。「企業が知りたいことは、学生がその経験を通じて何を学んだか。そして、結果としてどう成長したかということです」。このようなズレを生まないためにも、面接官が何を求めているのかを的確に判断し、論理的に情報を伝えることが大切なのだ。

　続いて、準備段階での注意点としては、用意した自己ＰＲの文章を丸暗記して面接に臨んではいけないということを挙げてくれた。なぜならば、暗記した言葉では面接官の心に熱意が伝わりづらく、緊張のあまり文章を忘れてしまう危険性もあるからだという。「自己ＰＲ文は、話すべきポイントのみを覚えましょう」。面接では、そのポイントに沿って話を進めつつ、臨機応変に内容を肉づけすると良いそうだ。

　さらに、マニュアル本に頼り過ぎてしまうのも問題だと瀬谷課長は話す。「マニュアル本の記述をそのまま答えても、面接官には本の引用だと気づかれてしまいます」。マニュアル本は参考程度に留め、自分にしかないアピールポイントで勝負をすることが必要だろう。

　最後に、瀬谷課長は「就職活動について悩んだ際は、ぜひ就職部を利用してください。一緒に問題を解決しましょう」とメッセージをくれた。就職部では、様々な資料の提供や、個別相談の実施など、学生の就職活動を全面的に支えているのだ。

　企業に直接アピールする場である面接試験では、騙しは通用しない。面接に辿り着くまでの努力を台無しにしないためにも、そのコツを掴んで、自分の力を全て出し切れるように準備しておこう。

（賀来潤恵）

記者の眼

レッテルという名の曲者

「全く最近の若者と言ったら――」。普段の生活やテレビ番組などで、年配の人がこのような言い方をしているのを耳にしたことのある人は多いはずだ。単純に言えば、近頃の若者たちに対する「呆れ」だろうか。確かに私の目から見ても、前述の言葉に納得せざるを得ないくらい非常識な行動をとる若者もいる。だがそれは、若者に限ったことなのだろうか。そして、そのように我々を非難する人たちは、他人に言える程の行動が取れているのだろうか。

　年上の人々が冒頭の言葉を発するのは、例えばこんな光景を目にするからだろう。それは、電車内であるのに携帯電話で通話する若者の姿だ。車内通話が禁じられていることなど、わかりきったことである。それにもかかわらず平気で通話している姿に腹が立つのであろう。しかし逆に、私の視点から車内を見渡すと、若者ばかりが通話しているわけではない。見るからに会社で重要職に就いていそうな人々までもが同じことをしているのだ。たとえそれが大切な内容であったとしても、私は「人のこと言えないじゃないか」と思ってしまう。

　私自身もそうだが、やはりどの世代も、あらゆる固定観念に流されレッテルを貼ってしまう。自分と同世代の人間を標準だと思ってしまうがあまり、大半の人が他の世代の人たちを受け入れられない社会が成り立っているのだろう。では、少しでも他の世代と分かり合えるようになるためには自分自身どのように振舞っていけばいいのだろうか。数年このことについて考えてきたが、その答えを見つけることができないまま、毎日が過ぎていった。

アルバイトを通じての成長

　私は一昨年の秋口、ファーストフード店でアルバイトを始めた。人生初の経験だったが、バイト仲間は皆いい人ばかりで、初めは楽しくて仕方がなかった。ところが突如転機が訪れる。ある社員が新たに入ってきたのだ。その社員とは30代の女性で、私と年が10歳程度しか離れていないのだが、意見は真っ向から対立した。彼女がとる全ての行動に対し怒りを覚え、早くバイトを辞めて、この状況から逃れようとも思った。

　けれども、そうしてしまうと一時的に気持ちは楽にはなるが、後悔の念にかられるだけだ。そう考えた私は、彼女に対する接し方を変えた。何事もポジティブに捉え、積極的に話すようにした。すると、これまでのことが嘘のように、何もかもがスムーズに運んだのだ。自分の行動次第で、人間関係がこんなに改善されるものかと思い知らされた経験であった。

　現在2年生の私であるが、あと1年もすれば就職活動が始まる。そしてそれが終われば、まもなく学生生活にも別れを告げ、一社会人として世間に出なければならない。社会人ともなればより一層、年上との付き合いが増え、世代が違う分、意見の食い違う場面も出てくるだろう。だが、そこで突っ張らず、相手の気持ちを理解し、落ち着いてその場を切り抜けていく。そうやって人間は成長していくものだと信じたい。

（経済学科2年　佐藤貴裕）

夢模様

Vol.6

経済学部経営学科4年　佐久間淳吏さん

演歌に捧げる我が人生

演歌をこよなく愛する佐久間さんは、衰退する演歌業界を危惧している。そんな演歌のためにも「歌手になって演歌を盛り上げたい」と力強く語る彼は、生まれ育った土地柄、小さい頃から演歌に慣れ親しんできた。そういった環境での生活が、演歌に対する情熱の基盤となっているのだ。

　夢の実現のため、日々ボイストレーニングに励む佐久間さんだが、歌唱力の向上だけでは歌手になれないと考えている。「歌が上手い人は大勢います。その中で勝ち残るには個性がなければいけません」。彼はこのように考え、イベントへの参加やテレビ出演など、活躍の場を広げることで個性に磨きをかけている。また、他者との差別化を図るために5年前から始めた三味線の腕前も、今ではホテルに営業で回ることができる程までに上達した。さらに大学卒業後には、歌手になるためのオーディションを受けようと考えているという。

　その一方で、佐久間さんは上京する際に両親と交わした、税理士の資格を取るという約束も忘れていない。現在税理士試験に向け予備校に通い、大学院で所得税の研究をすることも決まっている。

　様々な分野で挑戦を続ける佐久間さんだが、「演歌のためならどんな苦労もいといません」と言うように、演歌にかける想いは一際強い。自分の気持ちに正直に生きる彼は、これからも目標へ向かい歩み続ける。

（取材・構成　増井亮太）

編集後記

希望に満ちた将来を勝ち取るため、多くの大学生が日々就職活動を続けている。今号では、少しでもそんな人たちの力になりたいという思いから、就職試験対策を特集した。

　紹介した記事中には、本番を目前に控える学生には常識と言える内容も含まれているだろう。しかし、その基本的な部分こそが、本番で明暗を分けることになる。このことを今回の企画を通じて再確認して欲しい。

　アピールポイントが思い浮かばず、悩む就活生もいるだろう。だが各人の積み重ねてきた経験は、自然と独自の魅力を築き上げている。決して恐れることなく、自信を持って本番に挑もう。

（増井亮太）

企画　レイアウト　増井亮太
構成　今村隆介
取材　賀来潤恵
写真提供　㈱ダイヤモンド・ビッグアンドリード

社告

本紙2面コラム「夢模様」で将来の夢を語ってみませんか？
毎回、希望者のうち１人に将来の夢を語ってもらいます。
希望者は、将来の夢とそれを目指すうえで
現在行っている活動を簡単にまとめて
press@gakushuin.ac.jp まで送ってください。

学習院大学新聞社　2面

御礼

ご協力ありがとうございました

今回の編集作業において多くの皆様にご協力をいただきました。

皆様のご意見を参考に、紙面を構成させていただきました。ありがとうございました。今後ともよろしくお願いいたします。

学習院大学新聞社
黎明会館316号室　3986-0221（内線2607）
http://www-cc.gakushuin.ac.jp/~press

星の世界を訪ねて

寒く、空気の澄んだ冬は、最も星が美しく瞬く季節である。寒さゆえに足早に家路につきがちだが、夜空にきらめく星を眺めないのはもったいない。時には足を止め、夜空を彩る星々に思いを馳せてみてはいかがだろうか？

時を越えて人々を魅了する星空

季節の星座がわかる星座早見盤

星座の起源は古く3500年も昔に遡る。紀元前3000年、メソポタミア地方（現在のイラク付近）に住んでいた羊飼いたちは羊の群れを追いながら夜空を見上げていたそうだ。そして明るい星に羊の名前をつけたり星の並びを結んで、獣や巨人などの形を描いたりしていた。これが、星座のルーツとされている。そして、星の位置や動きを観測して暦が作られた。また、日食や月食、惑星の動きなどを手掛かりとし、「星占い」もするようになる。今も昔もよく使われる「12星座」は、この時代にはすでにつくられていた。

一方、古代中国では、太陽の通り道である黄道に沿って星座二十八宿が作られていた。これは月が約28日かけて黄道に沿って移動することに由来している。つまり、月は1日に一宿ずつ西から南へと移動していくということなわけだ。中国ほどの二十八宿を元にして惑星の運行を確立する必要ができた。そして1928年、国際天文学連合総会においてはほぼ全ての星座が正式に決定されたのだ。また、星座の境界も赤経・赤緯に沿って定められた。ただ、この時決められたのは、星座の名前と境界線だけで、星座のつなぎ方や星座絵については現在でもまだ正式には決められていない。これらが決まるのにはまだまだ長い年月を要するようだ。（吉崎大記）

星の魅力に迫る


熱心に星について語る山田さん

星座が誕生したのは、どのようなものがあるのだろうか。一説によると、星座を構成する星の輝き方や星座の大きさなどを確認するには、どうすれば良いのだろうか。二言で言うには瞬で、瞬かない星が恒星です。これは、恒星と惑星とを見分ける。星を見る際には、これで星の見つめ方や角などを確認すると、星座を発見しやすくなるのだ。

ところで、星座を構成する恒星と惑星とは、どのようなものなのだ。オリオン座が見つかるのは、全天体に明るいシリウスのあるおいぬ座や、冬は明るい星が1年中の中で最も多く見られる季節なんです。人間離れした山の中に行けば、星の美しさを堪能できるでしょう。また、星座を探したいならば、田舎よりもむしろ郊外が向いています。山奥だと星はたくさん見えすぎて、かえって星座を見つけにくくなってしまうのです。また、比較的明るいので、肉眼で見つけられるようだ。

とはいえ、星座を探すには、夜空を見慣れる必要がある。そのためには、プラネタリウムを活用するのが効果的だという。プラネタリウムは、かつて陸軍が星を探す訓練に使われていたようだ。また、航海も天文学の発達に重要な役割を果たしてきたようだ。今では毎日屋外で、毎日交通のために精密な天体位置表を作成している。1年間の星の動きが全て分かるというのだ。そして、一般向けには『天体年鑑』が便利である。星を見る際は、これで星の見つめ方や角などを確認すると、星座を発見しやすくなるのだ。

ところで、星座を構成する恒星と惑星とは、どのようなものなのだ。オリオン座が見つかるのは、全天体に明るいシリウスのあるおいぬ座や、冬は明るい星が1年の中で最も多く見られる季節なんです。人間離れした山の中に行けば、星の美しさを堪能できるでしょう。また、星座を探したいならば、田舎よりもむしろ郊外が向いています。山奥だと星はたくさん見えすぎて、かえって星座を見つけにくくなってしまうのです。また、比較的明るいので、肉眼で見つけられるようだ。

とはいえ、星座を探すには、夜空を見慣れる必要がある。そのためには、プラネタリウムを活用するのが効果的だという。プラネタリウムは、かつて陸軍が星を探す訓練に使われていたようだ。また、航海も天文学の発達に重要な役割を果たしてきたようだ。今では毎日屋外で、毎日交通のために精密な天体位置表を作成している。1年間の星の動きが全て分かるというのだ。そして、一般向けには『天体年鑑』が便利である。（小室真衣子）

室内で天体観測

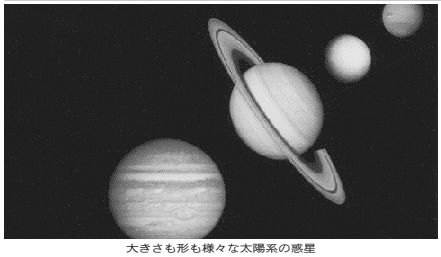
帰りが遅くなったある日、なんとなく星でも見てみようかと思い、空を見上げた。しかし、曇りの空には、1辺が明る過ぎるのが原因なのだろうか、ほとんどの明かりの無い住宅街からは見つかるに違いない。その思いに少し浮かれながら家路を急ぎ、部屋の窓から夜空を眺めてみた。だが、その期待もむなし星はどこにも見当たらなかった。やはりだめだ。だからと言って、ちょっと星を見るために、わざわざ天体観測に適した場所まで行くわけにもいかない。だが、そこで、なんとか身近で星の見える場所はないものかと考えていると、プラネタリウムの存在を思い出した。しかも、こんな学校帰りに気軽に立ち寄れる。まさに打ってつけのスポットだ。

かくしてその答えに行き着いた私だが、実はプラネタリウムを訪れたことは一度もないそこで、近隣におすすめの場所はないものかと友人に尋ねてみた。すると「サンシャインシティ」内にあるプラネタリウムを紹介された。さっそく足を運んでみる。

室内は、広く静かな雰囲気だ。暗いの足元に気をつけシートに腰を下ろし、わくわくしながら上演を待つ。係員のナレーションの後、いよいよスクリーンが明るくなり、夕方から夜へと時が移り、ちらほらと星が映し出される。スクリーン上に鮮明に輝き、漆黒の夜空に彩りを添えた。明上に広がる星の海に、まるで体が包まれているかのようだ。そのまゆゆさは、バーチャリアリティの星ということを忘れさせるほど、どこか自然の豊かな場所に横になりながら、星を眺めているという錯覚に陥らせてくれる。星々に見とれていると、ナレーターの解説が聞こえてきた。全天で最も明るい星として有名なシリウスの紹介。オリオン座やおうし座の伝説、2つの星からなるふたご座の紹介。実は4等星や5等星といった明るさの異なる星からなる星座だという。話が、さらに、弟という名称で知られる、なかなかに難しい天体の解説。様々な星の説明を聞くことができる。その分かりやすく、軟らかにロ調にしばし癒された。夢中で星座を眺めていると、あっという間にプログラムは終わりを迎える。プラネタリウムという独特の場所が与える雰囲気に酔い痴れながら、しばらく目を閉じていると、美しい星々がまだ、またたの奥で輝き続けていた。

一般的に星の楽しみかたと言うのは、ただはんやりと夜空の星を眺めたり、星に思いを馳せたりすることを想像するかもしれない。だが、プラネタリウムつまり人工の星を見たからの星に隠された伝説や逸話に耳を傾けるのも、なかなかに楽しい星の楽しみ方である。たまには気分を変えて、癒しの空間であるプラネタリウムに足を運んでみてはいかがだろうか。きっと今まで知らなかった星に陽る知識や想がかなりを得ることができるだろう。（掛川千尋）

多種多様な太陽系の星々


大きさも形も様々な太陽系の惑星

太陽系とは、太陽とその周りにある惑星の総称のことを言う。広い教育系の中心から約3万5千年離れたところにあり、その中には地球を含む8つの惑星や彗星、小惑星などが存在する。

太陽系の中を回る惑星はその性質や位置から大きく2つに分けられる。地球の内側を回る水星と金星は「内惑星」と呼ばれ、それ以外は「外惑星」と位置づけられている。さらに、水星、金星、地球、火星は、岩石や金属鉄の塊からできているため「地球型惑星」と区別されることもある。

一方の木星や土星は液体やガスでできていることから「木星型惑星」と呼ばれている。太陽系の中にはこうした惑星の他に約600の小惑星や700ほどの彗星があるとされる。

この他にも惑星には様々な性質がある。例えばそれぞれの惑星の周りには衛星がいくつ回っているか、中でも土星は特に衛星の数が多いことでも知られる。名前がつけられた衛星だけでも18個も持っているのだ。また、太陽系は太陽に近ければ近いほど水が蒸発して乾燥した星となり、遠ければ遠いほど氷に覆われた星となる。ちなみに、水が液体の状態であるのは地球だけだ。

また、星間雲から太陽が生まれてからすでに46億年、太陽の恒星の寿命はその質量で決まっており太陽程度の大きさだと、おおよそ100億年くらいは生きれる。そのため、あと50億年もすれば、まずはその10倍ほど肥満し、赤色巨星となり地球を飲み込んで膨張を続ける。その後は小さくなり、やがて地球はその大きさの白色矮星になると言われている。

私たちにあらゆる恐みを与えてくれる太陽はこうして星としての一生を終えるのだ。すなわちそれは太陽系の終焉を意味する。太陽系の歴史はさて、まさに折り返し地点に来ているのかもしれない。（吉崎大記）

書読

些末なおもいで

この一些末な思い出」は第2回野性時代青春文学大賞を受賞した作品である。主人公の檜山が、高校生だった頃の思い出を回想していくものだ。

主人公は不眠症で眠ることができない檜山という少年である。物語は、彼が夜の町を彷徨している矢鳴（やなる）に出会い親交を深めていくところから始まる。そこに矢鳴の幼なじみであるキューピーさんも加わり、心地よい日々を過ごすようになる。しかし、彼らにとって、惑星の光は太陽の光を通してもちらつかないのだ。

最後に、天文教育者として山田さんは「まず宇宙に目を向け、そして再び地球を見つめ直してほしいと思います」と語った。山田さんは一人でも多くの人に星への興味を持ってもらいたいと願っているそうだ。

まぼゆい星の輝きに、しばらく全てを忘れてみる。そして、もう一度日常に戻ってみて、新しい目で星を見ることができるかもしれない。星々は、私たちに大切なことを教えてくれるかけがえのない存在なのである。（小室真衣子）

胸に詰まる喪失の哀しみ

無くなっていく「あれ」と呼ばれる苦痛にかかる。矢鳴は、その症状が進行し、次第に全身が消えていく。

この作品は壮絶の「熱血」の青春文学とは一線を画している。矢鳴が「あれ」にかかると以外はこれといった事件が起こるわけではない。ただ矢鳴の存在が消えていくまでの過程が静かに流べられていく。その中で檜山は人の人間がいなくなっても何も変わらない日常の残酷さを痛感する。またたつの間に自分も矢鳴の事を忘れ、強いて言えばいつもの「一」という表現が度々使われている。それは近所のパン屋の名前であったり、かつての代わりに立つられたマネキンであったりする。それらはいずれもがて忘れ去られてしまうものである。

だが、結局は矢鳴との思い出も、「些末なもの」として檜山の記憶から薄れていってしまうのかもしれない。

この物語はそんな喪失の哀しみが描かれている。（癸）

（癸田貴著　角川書店　税込1155円　2006年刊）

私の回顧録から ～page 4～

文学部フランス文学科
Thierry Mare 教授

日本と芝居に惹かれて

今回は、フランス文学科のT・マレ教授にお話を伺いました。先生のフランスで過ごした学生時代は、どのようものだったのでしょうか。

日本文化との出会い

20歳から24歳にかけて、私はパリの高等師範学校に通っていました。高等師範学校には、フランス独自の教育機関であるグランドゼコールの一種です。

私はそこで哲学に励むかたわら、芝居に没頭していました。実は芝居のおかげで、日本に興味を持つようになったのです。

劇関係の仕事をしていました。特に父は日本の文化に大変興味を持っており、日本文学を舞台で演じたこともありました。自然に私も、そんなの影響で日本に関する書物を紐解くようになったのです。

私にとっての分岐点

高等師範学校に在学中、私は書物の中にはない、実際の日本の姿を見たいという想いを募らせていきます。また、演劇に携わりたいという希望もありました。あの頃の私は、芝居のワークショップに参加したり、脚本を書いたりと活発行動に打ち込んでいました。当時の私は、日本へ行かん、それとも芝居を続けるかで迷っていました。悩んだ挙句、海外でさらに色々な経験を積みたいと思い、子供の頃からの憧れの国である日本へ行くことを決意したのです。


フランスでの生活を語るマレ教授

そして日本へ

日本に来てからの4年間、私は辻邦生先生の主催した日本語勉強会に参加していました。そこで私は日本のもも、悔いの残らない人生を送ってほしいと思います。

（取材・構成　小室真衣子）

PROFILE

1957年フランス、アミアン市生まれ。ユルム街高等師範学校卒。（元文学博士）。86年本学フランス文学科に赴任し、97年より現職。

CAMPUS GUIDE

●軽音楽部
「2月定期演奏会」
日時：2月26日（月）
料金：500円（ドリンク代）
内容：様々なジャンルに挑戦しています。頑張って練習した成果を、是非見に来てください。お待ちしております。

●観光事業研究部
「スキー・スノーボードツアー」
日時：2月26日（月）～3月1日（木）
場所：群馬県尾瀬・岩鞍スキー場
料金：約2400円
内容：とりあえず楽しいです！3泊4日で2400円は安い！友達を誘って参加してみてはいかがでしょうか。興味のあるかたは、黎明会館204号室まで来てください。

●吹奏楽部
「吹奏部卒業演奏会」
日時：3月7日（水）
場所：百周年記念会館
料金：無料
内容：クラシックコンサートです。4年生の有終の美を飾ります。皆様様非いらしてください。

●吹奏楽好会
「3月定期演奏会」
日時：2月28日（水）
場所：東高円寺ロサンゼルス
料金：500円（ドリンク代）
内容：様々なジャンルに挑戦しています。頑張って練習した成果を、是非見に来てください。お待ちしております。

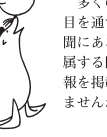
●吹奏楽部
「3月定期演奏会」
日時：2月28日（水）
3月1日（木）
場所：28日：寺子屋会館ホール
1日：沼袋サンクチュアリ
料金：28日：無料
1日：500円（ドリンク代）
内容：主にロックのライブをやります！メタル、メロコア、J-POPなど、幅広くやります。見に来てください！

社告

CAMPUS GUIDE

募集のお知らせ

キャンパスガイドでは、学内外で行われる部活動およびサークルのイベントを紹介しています。



多くの学生が目を通す大学新聞にあなたが所属する団体の情報を掲載してみませんか？

学習院大学新聞社　3面

学習院大学新聞 On Webへ 今すぐ アクセス。

http://www-cc.gakushuin.ac.jp/~press

取材・構成
掛川　千尋
小室真衣子
吉崎　大記

土壇場から相手を攻略

最終戦での劇的勝利

アメリカンフットボール部

昨年の11月25日、アミノバイタルフィールドにて、秋季リーグ最終節、対武蔵工業大戦が行われた。両校ともディフェンス陣が堅守を見せ、緊迫した試合となった。互いに無得点で迎えた第4クオーター。本学は失点を許すが、終盤で勝ち越しに成功。7—6と見事な逆転勝利で今リーグを締めくくった。

「1年間の集大成を見せる気持ちで、今シーズンを何としても勝って終わらせます」。試合前、寺島康平主将（営4）が語った言葉は、チーム全体の心境を表していた。対戦相手の武蔵工大は、現在リーグ1位の強敵。自分たちの力を信じ、チームが一つになって戦わなければ勝てないことを誰もが認識していた。

最終戦という独特の緊張感が漂う中、試合は始まった。本学は序盤から、ディフェンス陣が好守を連発。安定した守備で相手のゲイン（前進）を許さず、試合の流れを掴ませない。オフェンスでは、クオーターバックの横川祐治選手（法4）が中心となり、パスとランを効果的に使い、攻め込んでいく。しかし、肝心なところで武蔵工大の守備を崩すことができない。リズムを作れないまま、第1クオーターが終了した。

第2クオーターに入ると、相手の素早いパス回しに、本学はかき乱され始める。勢いに乗られ、エンドゾーンまで詰め寄られる厳しい状況に陥った。だが相手のタッチダウン寸前で、福田健児選手（哲2）がこれを阻止。苦しみながらも、ピンチを乗り切った。

ハーフタイムに円陣を組み、一致団結して挑んだ第3クオーター。本学は増川敬亮選手（法4）の好キャッチや相手の反則などで、フレッシュを重ねていく。エンドゾーン手前まで攻めたが、惜しくも直前で倒され得点には至らない。試合は膠着状態に入り、両校とも我慢の時間が続いた。

試合が動いたのは、第4クオーターの開始直後だった。スクラムからこぼれたボールを相手がキャッチ。一気に走られると、本学はこれを止めることができず、タッチダウンを奪われる。その後のパットは外れたが、この時点で0—6。終盤で相手を追いかける立場となってしまった。

勝利を諦めない本学は、怒涛の攻撃で相手を圧倒していく。第4クオーター残り1分、ゴール前までボールを進め、ラストチャンスを迎えた。張り詰めた空気に包まれる中、本学は最後の攻撃に臨む。速攻に望みを託し、エンドゾーンで待ち構えていた川嵜秀徳選手（営4）へ横川選手がパスを送る。これが見事に通り、タッチダウンに成功。土壇場で同点に追いついた。そして興奮冷めやらぬまま、決まれば逆転のパットに挑む。「これまでのキックの中で一番緊張しました」という寺島主将がこれを確実に決め、7—6と逆転。勝利をたぐり寄せる、貴重な勝ち越し点を挙げた。

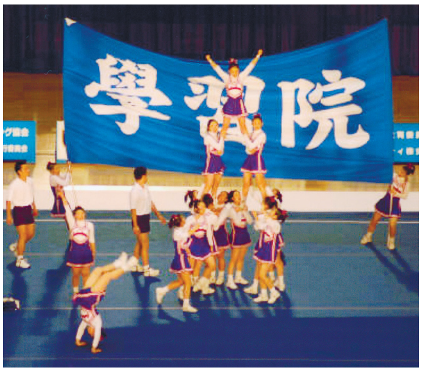
相手に攻撃権が移り、本学は残り僅かな時間を決死のディフェンスで凌ぐ。そして寺島主将のインターセプトと同時に試合は終了。劇的な逆転勝利を収め、会場が大歓声に沸いた。「パットが決まった時は、最高の瞬間でした。4年間で最も嬉しかったです」と寺島主将は満足げに試合を振り返った。

最後まで諦めない姿勢で、勝利への執念を見せた本学。最高の形で今シーズンを締めくくり、来季へ弾みをつけた。この勝負強さを武器に、彼らは1部昇格という目標へ向け、突き進んでいくだろう。（下里豪平）


勝利を信じ、敵陣へ一斉に攻め上がる本学選手たち

苦境で魅せた演技

應援團チアリーダー部



士気を鼓舞しながら迫真の演技を披露する本学

昨年12月9、10日に全日本学生選手権大会が開催された。会場の国立代々木競技場第1体育館には、全国から約100チームが集結。本学からは、ディビジョン1、ディビジョン2、演技発表のみのエキシビジョンの3部門に分かれて、3チームが出場した。9月から練習を始め、本番さながらの通し練習も、100回以上繰り返してきた本学。ディビジョン1シード出場のAチームの中村万梨子部長（英4）は大会前、「全ての技を成功させ、観客の皆さんに気持ちの伝わる演技をし、感動させたいです」と熱い思いを語っていた。

しかし、大会前日の練習でAチームのメンバーの1人が怪我をしてしまう。そして当日の朝に、本番の構成をやむを得ず変えることになる。彼女たちは残されたわずかな時間で一度も通したことがない演技の練習を重ねた。

そうして迎えた本番は、序盤から必死に拍子を取り、それに合わせて各々のポジションについていく。その中で、スタンツと総称される組み技や回転技などを次々と成功させる。急遽変更したことを感じさせない素晴らしい演技で、強豪チームとしての実力を発揮した。

やがて音楽が消え、掛け声を中心とした応援へと移る。彼女たちはこれまでの不安を振り払うかのごとく、力の限り声を出した。再び音楽が流れ始め、クライマックスへと向かう。ここで2つのタワーを組むという大技に挑戦。一人、また一人と基盤を作っていく。だが、片方のタワーが頂上でぐらつき、すぐに最後の一人を落としてしまう。最終的に成功したのは1つのみだったが、それ以外は、ほぼ完璧であった。

こうして本学Aチームは、渾身の力を振り絞った2分30秒の演技を終えた。

結果は210・5点で、16位。アクシデントにより難易度の高い技ができなかったにもかかわらず、チームの予想を上回る高得点を獲得した。チアリーディング協会関係者や他団体からも、短時間で確実に技を仕上げた点などを高く評価された。また、Bチームもディビジョン2で171点と11位で、まずまずの成績を残している。

大会後、中村部長は「不測の事態でチームの真価が問われることになった大会で、自分たちの真の強さを出すことができました」と振り返る。窮地を乗り越えての演技は、多くの観衆を魅了した。それを可能にした強い精神力で、今後も彼女たちは感動を生み出していくだろう。（中谷美穂）

DEBUT

アイスホッケー部前主将

飯田　有斗さん（政４）

氷に刻む努力の軌跡

今季までアイスホッケー部主将を務めた飯田さんは、大学に入ってからアイスホッケーを始めた。未経験からのスタートであったため、最初は氷上を滑ることも間々ならなかったという。

コーチの厳しいトレーニングに耐え、ひた向きに練習に取り組んだ飯田さんは、1年の秋季リーグでデビュー戦を迎える。1年生でただ1人ベンチ入りを果たした彼は、「努力が認められたことが本当に嬉しかったです。最初の半年は、ただひたすら頑張った時期でしたから」と当時を振り返る。試合には後半途中から出場し、見事得点を決めた。「初めて試合のリンクに立ったときは、雰囲気に飲まれてしまいました。けれど当時の主将に、『ただ思いっきりやればいい』と言われ、緊張がほぐれました」とデビュー戦での心境を語った。

デビュー戦を経て飯田さんは、基礎スケーティングや戦術の知識など、自分の足りないものの多さを再認識する。そこで飯田さんは、少しでも技術を向上させるために、様々な形で練習時間を増やしていく。社会人や他大学の練習に積極的に参加し、深夜練習も行った。また、陸上での走り込みにも力を入れ、足腰の強化を図る。デビュー戦以降の試合には全て出場し、試合経験を培っていった。

こうしてチームの中心選手となった飯田さんは、3年の秋季に主将に選ばれる。それからは全体をまとめつつ、皆のモチベーションを高く保つことに重点を置いていく。その結果、チームの結束を強くすることに成功した。

そして、引退試合となった秋季リーグ最終戦。その試合には、3年前の飯田さんと同じように、初出場の1年生がいたという。その1年生に、「ただ思いっきりやってこい」と言葉をかけた。4年間の積み重ねが、かつては雰囲気に飲まれていた飯田さんを頼れる主将へと成長させていたのだ。

全くの初心者から始めたアイスホッケーを、妥協のない努力で上達させた飯田さん。彼の真摯な姿勢は後輩に受け継がれ、2部昇格という目標への原動力となっていくだろう。（下里豪平）

心技一体の演武

合気道部

去る12月2日、日本武道館にて全国学生演武大会が行われた。本学からは山内正樹主将（法3）、大久保敬済さん（法3）、桐生太豊さん（済3）の3名が出場。日頃の鍛錬の成果を存分に発揮し、素晴らしい演武を披露した。

本学選手たちにとって、大学祭後の新たな目標となっていた今大会。そんな大舞台を目前に控え、山内主将は「普段通りのことをやるだけです」と力強く語ってくれた。実際、彼らの演武は堂々たるものだった。

2分30秒という短い時間の中で、冷静かつ鮮やかに技を極めていく。その姿からは、自己の心身を練成するという合気道の真髄が窺えた。

演武は山内主将と桐生さんの2人による押え技から始まった。この技は合気道の基礎であり、基本を疎かにせず、地道に練習を繰り返してきた彼らが最も得意とするものだ。まず、桐生さんの正面打ちから山内主将が手首と肘を極めて押さえ込む一教へとつなげる。それから四教までを完璧にこなし、肩取りからの二教も成功させた。

その後、桐生さんと大久保さんが交代し、今度は迫力のある投げ技中心の組み立てに入った。山内主将が大久保さんの横面打ちを受け、難易度の高い四方投げなどを豪快に披露する。大久保さんも確実な受身でこれに応えた。こうして最後まで完成度の高い技を極め続け、1年間の集大成とも言える演武は終了した。

大会終了後、「緊張もなく落ち着いてやれましたが、予定よりも技が少なくなってしまいました」と明かした山内主将。四大戦では、さらに磨きのかかった彼らの技を存分に見せてもらいたい。（山崎晃志）


次々に技を繰り出す山内主将（左）

無念のリタイア

自転車愛好会


優勝を目指し、懸命な走りを見せる鈴木選手

昨年の12月10日、国営昭和記念公園にて、全日本学生クリテリウム・シリーズ東京昭和記念公園ラウンドが行われた。本学からは鈴木禄徳選手（済1・よしのり）と瀧澤建四郎選手（仏1）の2人が出場。鈴木選手は前日の大会の優勝者であり、実力は折り紙つきだ。瀧澤選手も前日リタイアのリベンジを果たすべく上位入賞を目指す。

今大会では1周5kmのコースを6周して、1周ごとの順位によってポイントが与えられる。そして、その総計で順位が決定されるという形式だ。そのため、各周のゴール地点での激しい競り合いは必至である。

コースは前日の雨の影響でコーナーが滑りやすく、リタイアする選手が続出する難しいレースとなった。このような条件の中、鈴木選手は順調なスタートを切り、先頭でペースを作る。また、瀧澤選手も快調な走りで、上位を窺える位置につけた。

中盤までは本学選手の健闘が続いた。鈴木選手は毎周回ポイント争いに絡み、3位、4位、3位と優勝も狙える勢いを見せる。だが、5周目にタイヤがパンクする不測の事態が起こってしまう。瀧澤選手も4周目に落車してしまい、未完走に終わる。高いモチベーションから2日連続の優勝が期待されたが、結果にはつながらず、2人にとって苦い経験となった。

試合後、鈴木選手は「リタイアは残念でしたが、練習の成果は出せました。しっかりとレースを作ることができた点は自信になります」と語ってくれた。結果は伴わなかったものの、レース展開には満足できたようだ。

今回の経験を糧にできれば、インカレでは華々しい活躍を見せてくれるだろう。彼らの今後の躍進する姿からは目が離せない。（平野健）

TOPICS

その他の試合結果

【硬式野球部】▼秋季入替戦▽対上智大1勝2敗　4部残留

【準硬式野球部】▼秋季リーグ▽5勝5敗　3部3位

【ソフトボール部男子】▼関東大学ソフトボール選手権大会▽3勝1敗　3位

【ソフトボール部女子】▼関東大学ソフトボール選手権大会▽2回戦敗退

【ホッケー部男子】▼全日本学生選手権大会▽対東海大3—2▽対立命館大0—5▼甲南戦▽0—2

【弓道部男子】▼入替戦▽対専修大　勝ち　3部昇格

【弓道部女子】▼入替戦▽対東京農業大、早稲田大負け　2部残留

【ラグビー部】▼秋季公式戦▽対東京大33—7

【剣道部女子】▼三大学定期戦▽1勝1敗1分　3位

デスクの片隅

誰だって苦労はしたくない。とりわけ私は、地道な努力が人一倍嫌いだった。だがこの大学新聞社に入って気づいた大切なことがある。それは、苦労なくして何かを成し遂げることはできないということだ▼例えば、紙面のレイアウト。頭に思い浮かべて描き出してみても、こちらが立てばあちらが立たないというように、必ず障害にぶつかる。様々な策を講じ、やっとの思いでその障害を取り除くと、今度は過去にあるレイアウトと類似してしまっている。次第に八方塞がりな気分になり、もう投げ出したいと思うこともあった▼しかしここで諦めず、一からやり直してまた描き出す。次の日も、またその次の日も。そうして時間をかけていると、ある時突然「これだ！」という閃きが訪れるのだ。このようにして自信作が出来上がった後には、何物にも代え難い達成感がある▼努力は決して無駄にならない。部活動を通じてそう思えるようになったのは、とても幸せなことだ。私が引退する日には、最高の達成感を味わえるようにしたい。（流）